

あくまでも自分史として

# 「岳陽」と共に

第 2 号

発行日  
2023.4.30  
編集・発行  
井上講四／堂本彰夫  
※連絡先  
〒901-2225  
沖縄県宜野湾市  
大謝名 3-13-24  
教育協働研究所  
～岳陽舎～  
(井上講四宅)  
Tel:098-963-9282  
E-mail:  
gakuyou17@outlook.jp

○「傷心?」から始まった、私の「第2の人生」!!

ということとで、ここから、改めて、私自身の「自分史」めくりということになるが、まずは、多少?感傷的とはなるが、『傷心?』から始まった、私の『第2の人生』!! ということから始めていきたい。これに関しては、当時の、次の文章がすべてを物語っている!改めて見てみると、

「...それを支えたのは「意地?」だった!!...この「教育協働への道」も、何とか100号を迎えることとなった! :長年勤めた(26年間)琉球大学での職を、ある事情(想い)から、定年2年前を前倒しして辞し(その後、非常勤3年を行ったが、ここ沖縄の地を去ることなく、爾來6年、遠望の東シナ海を見遣りながら、ある意味悠々自適に生きてきたわけであるが、その日々は、実は、まさに「傷心?」から始まったと言えるであろう(そのころの状況を伝えるものが、別コーナーで綴っていた「東シナ海眺望記」であり、「じのん道遠記」である!)!!本当に辛かった!そして、今思えば、よくぞここまで来たものである!!とは言え、やはり、今思い返すと、そういう時があったからこそ、また、一方で、その中に、自らの魂の呻き、自らの思いを、言葉に(下手な短歌を交えながら)、そして、一部写真に託してこられたからこそ、今があることも真実である!そして、それを支えたのが、もう一つの、私の「意地?」であったことも事実であろう!!まさに、「傷心?」と「意地?」が、この6年間の私をつくり上げたということになるが、その一方の「意地?」の具体的な形が、この「教育協働への道」という教育論考(雑文?)ということなのである!」

以上だが、古希を越えた今も、この想いは変わらない!

○改めて、「教育協働への道」に託したもの!

とは言え、その「傷心?」と「意地?」の向こう側にあったものは、たとえ世間?から遠ざかっても、何とか生きていかなければならない(本当に、職を失えば、厳しい現実が待っている!今までの自分とは、そして、今までやってきたことは何だったのか?そういう自己猜疑にも似た感情に苛まれる!)!そうでなければ、私を信じてくれてる人、頼りにしてくれている人に申し訳ない(もちろん、我が奥さんは、その最たる人であるが!!)!

ただ、その際、本当に救いだつたのは、最後のゼミ生達であり、一部とはなつたが?、変わらぬ厚情を頂いた人々(卒業生達を含む)との交流であつたわけであるが、とりわけ自分自身を奮い立たせたのは、最初の頃の卒業生(準?ゼミ生S君:当時日教育大学の准教授に誘われた、ズームによる交流(↓教育協働セミナー)である。

詳しくは、ここでは書けないが、そこでの出会いと交流が、私の中に沈潜していた「教育への思い」の覚醒そして、長年唱えてきた「教育協働」のしくみづくり(心とづくりとまっすぐりの循環)への、新たな(最後の?)コミットメントの機会となつたのである!

ちなみに、そのズーム交流であるが、ある意味、その気になれば?、何とかなるものではある!!あれだけ、今で言うICTへの懷疑?を叫んでいた私が、その恩恵に浴しているのである(変われば変わるものである!)。とにかく、パソコンとの付き合いが、今の私を支えているわけであるが(目や四肢の不調とつき合いながら)、これがいつまでやれるかは、神のみぞ知るところである!!

○心残りは、「親バカ?」の締め!!

ということとで、今、こうして、曲がりなりにも、心穏やかに、ここ沖縄の地で、第二の人生を送れている私であるが、強いて一つだけ挙げれば、気がかりなことがある!それは、多少文脈が違うが、三人の娘達、とりわけ次女、二女のことであるが(もちろん長女のこともそうであるが、その気がかりは、彼女の、三人の息子達、つまり孫達に移行している)、俗に言う「年頃」からは、遥かに遠ざかってしまっている!こればかりは、父親の私からすれば、いかんともしがたく、今の彼女達の生き様を、傍から見守ることしか出来ない!!それが、ある意味辛い!!

「それでいい、それでいいのだ!」、要は、自分が納得出来る今、そして、これからであればいいのだ!。そう自らに言い聞かせながら(彼女らに思いを寄せながら)、老いゆく父親としての思いを抱いてはいるのであるが、果たして、これからどうなっていくのであろうか?言うなれば、心残りは、「親バカ?」の締めということであろうか!!

そんな中、今、改めて思い出すのは、彼女達の、それぞれの「二十歳の誕生日」に送った色紙のことである!まさに親バカの極致であろうが、そのそれぞれに、彼女達が示していた(否、私が、無理やり、そう思おうとした?ただし、それなりの根拠?はあつた?)、生き方の匂いみたいなものを、三つの言葉に託して書いていたのである!

今も、彼女達が、その色紙をもっているのかどうか?そして、その言葉を、今はどう思っているのかは、もちろん定かではないが(机のどこかにしまい込んで、そのことを忘れているかもしれない?)、それが、それぞれ、「感性」(長女)、「知性」(次女)、「理性」(三女)という言葉である!住む場所も、仕事も、そして人生模様も、それぞれ異なっているが、現在もなお、私は、その感覚?を変わらず大切にしていきたいと思っている!まさしく、この期に及んで、再度の親バカ?ということである!!

ちなみに、おじいさんという思いや立場は、あまり前面には出てこない!!何とも薄情な「じいじ」ではある!!この間のコロナ過が、それに拍車をかけた!!

(井上)

○卒郷？で、改めて、「子ども(童)」に戻る？！

さて、今度は、私堂本の番であるが、望郷を終え、卒郷を迎えた今、何故か書きたくなつたことは、小さかつた頃の自分である(何だか矛盾しているようだが?)!!

田幸(ターンム) \*の子: ねえ、ねえ、おとうさん! 何やら棒切れとビニール袋をもつたおじいさんが、水の流れを見ながら、こちらに近づいてくるよ! 何をやるんだろうね?

田幸の親: 多分、それはメダカ捕りだよ!

田幸の子: え? どうして分かるの? それよりも何よりも、どうして、そんなもので捕れるの?

田幸の親: 実は、あのおじいさんは、去年もここにきて捕つていったのだよ! 信じられないかもしれないけど、田んぼと小川の間に出てくる小さな流れにビニール袋を入れ、小石二つを重しにして、そこに沈めておくのだよ!

田幸の子: どうして、そんなんで捕れるの? 網で掬うということなら分かるけど...

田幸の親: 昔は、網なんてなかったのだから、子ども達は、知恵(じんぶん)を働かせて、魚を捕っていたのだからね?

田幸の子: でも、それだけでは捕れないよね?

田幸の親: そうだね! だから、持つている棒切れで、流れの上の方から、そおと叩いて追い込んでいくんだよ!

田幸の子: へえ。本当に、そんなんで捕れるんだ!

田幸の親: もちろん、そんなふうまくいかなないよ! だけど、何度も粘り強くやれば、その内の一回位はうまくいくんだよ!

田幸の子: そうなんだあ! 簡単にはいかないんだあ!

田幸の親: そういうことだね! でも、工夫と我慢で、何とかやれる。そういうことを、このおじいさん達は、今でも覚えていて、そういうことだよ! だけど、今となっては、何とも珍しいね!

※水のきれいな水田で栽培される里芋の一種(水芋とも)。沖縄では「ターム」と呼ばれ、おいしく食されている。↓ドウルワカシーなど

※沖縄では、知恵のことを「じんぶん(人文?)」と呼んでいる。年をとつても、「子ども」の自分がある?! しかし、それは、決して望郷のそれではない?! そこに、卒郷?も!!

短歌に託して思ひ出される、過去のあれこれ! <

・「傷心?」と「意地?」 そう語れるは  
また幸せ? 通常(まうづ)は、それさえ言えず!!

・ひとづくりは まちづくり  
まちづくりは ひとづくり いかにそを

・二十歳の日に 三人娘をぎれに送った 三つの言葉  
今なお然りと 再度の親バカ

・今年も密かに メダカ捕り  
ビニール袋と 石ころ二つ 流石昭和童

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕 ② <

○改めて、「老松」とは?

先に、福岡県に数多く存在する「老松神社」は、かの菅原道真とその眷属を祀る神社とされているが、本当は、「開化天皇 第9代/欠史八代の最後、あるいは「大國主命」を隠し祀る神社ではないか(天満神/天神様の名の下、開化天皇が消されている? 隠されている?) ということであつたが、改めて、それはどういうことか? そして、何故、そうなっているのかである?! その続きを記そう。

要は、例えば「太宰府天満宮」は、「道真」と縁の深い神社であるが、そこには前史があり、元来は九州倭(わ) / (い) 国政権直属の神社であり、始原の神とされた「天御中主(北極星?)」ら、天神(あまの) / 海神(うみのかみ) 族を祭っていたのではないかとということである!!

すなわち、道真を排斥した藤原氏が、度重なる災害を道真の怨霊のせいだと宣伝したのと(北野天満宮の創始、それに合わせて、何とかして九州倭国政権の残滓(ざんし)を消し去ろうとした政権が、都合の良い「祭神の入れ替え」を行ったのではないかとということである!!

② そんな「祭神の入れ替え」というような大それたことがあつたのだとは、現代の我々からすれば、とても信じられないことなのだが、どうも、そういうことは、しばしば行われてきたようなのである(その最大のものが、かの伊勢神宮/内宮の祭神である?)!!

ちなみに、菅原(菅公)家は、血統的には、例の「出雲の国譲り」において「先遣隊」の役割を担つたとされる「天穗日(あめのほり)命(出雲大社宮司・出雲臣氏↓千家の祖神)を祖とし(土師氏も?)、一方でまた、「倭奴(那)国」の王(AD57年に後漢から金印を貰つた?)であつたとされる「大幡主(武埴安彦・鰐族?/榎田神社の主神)」の一統ともされるのである?! そして、前者は、いわゆる「尾張氏」の一派ともされている!!

出雲と北部九州、そして、大和や丹波/伊勢/尾張や近江(もちろん紀伊、吉備も!)の關係については、今後改めて整理していかなければならないが、大きな枠組みとしては、出雲と北部九州の關係が、まずは大きく横たわっている?! そして、その出雲と北部九州の關係が、かの「老松神社」に被せられている?! それが、「開化天皇(大國主命?)」の頃の状況であり、当時(4世紀頃?)の九州倭国政権の実体であつたということである!!

具体的には、二世紀末の「倭国大乱」、それに伴う「那(奴)国」勢力(王族?)の衰退・各地への飛散?、伊都国と邪馬台国(使用字や読み方には異同もあるが!)による「新?倭国(邪馬台国連合)親魏倭王卑弥呼」の登場、その後の「台与」(これも、使用字や読み方には異同もあるが!)への継承、そして、それ以降、歴史の闇?に消えていった「新?倭国」(空白の4世紀)!! しかも、そこには、「紀(木)姫(氏)」「熊襲(球磨曾於)族」の関わりがある!!

実は、その辺りのことが、この「老松神社」から見えてくるのではないかとということであるが、今後は、その「闇?」に関わる、神功皇后/武内宿禰/応神天皇等に仮託されている史実?を、いかに解明していくかである?! そして、それらは、当然、朝鮮半島との關係も視野に入ってくる!!

(つづく) (堂本)

〔編集後記〕何か、今回も作成し終えたが、やはり井上と堂本の役割分担?は難しい!! ある意味、それは当然のことではあるので、それを楽しみながらやっていたいくしかない! (井上/堂本)